

論 文 の 要 旨

学籍番号 61920002

氏 名 中村拓人

題 目	自閉スペクトラム症児の疾患特異的参加測定ツール ： 開発と実証研究
要 旨	
<p>自閉スペクトラム症(ASD)はコミュニケーションの障害や, 限定された興味・行動, 非定型な感覚処理を特徴とする代表的な神経発達症であり, 我が国の障害児支援において最も広く認知された疾患の 1 つである. ASD 児の支援では早期支援が重要視されており, その成果として参加の改善がもてられている. しかし, ASD 児の障害特性を考慮した利用可能な参加測定ツールはほとんどない. そこで, 本研究では ASD 児のための疾患特異的な参加測定ツールを開発し, 実証研究によって参加の予測モデルを構築した.</p> <p>研究 1 では, 測定ツールの項目開発を目的とし, ナラティブレビューと専門家へのインタビューが実施された. 第 1 フェーズでは, 測定ツールのデザインが検討され, 国際生活機能分類児童版(ICF-CY)に基づいた 8 つのドメインからなる養育者記入式の質問紙デザインが採用された. さらに, 参加に関する文献のナラティブレビューによって 83 の項目案が作成された. 第 2 フェーズでは, 14 名の専門家へのインタビューによってデータが収集され, 質的内容分析によって内容妥当性が検証された. 最終的に質問項目は 51 になった. 測定ツールは「こどもの参加質問紙(Participation Questionnaire for Preschoolers : PQP)」と命名された. PQP は複数の疾患特異的な項目によって構成さ</p>	

れていたが、内容妥当性がツールの回答者である ASD 児の養育者から検証されていない等の課題が残った。

研究 2 では、項目のさらなる内容妥当性の検証のために、専門家および ASD 児の養育者へのインタビューを実施した。研究 2 では、測定ツールの対象年齢が拡大されたため、名称は「改訂版こどもの参加質問紙」(Participation Questionnaire for Preschoolers-Revised : PQP2)へと変更された。8 名の専門家と 11 名の養育者への合計 27 回のインタビューによってデータが収集され、質的内容分析によって内容妥当性を検証した。理解可能性を向上させるために、項目の配置が変更され、(“あなた”や“あなたのお子さん”といった)質問の主格の変更を最低限度に制限したデザインとなった。また活動と参加の区別に関する議論が行われ、2 つのドメインが削除された。データが飽和に達した判断されるまでデータ収集は継続され、最終的に項目は 36 となった。これにより PQP 2 の項目開発が完了した。

研究 3 では、横断研究によって PQP2 の開発と信頼性・妥当性の検証が行われた。医療・福祉サービスを利用している ASD 児の養育者に質問紙への回答を依頼した。回収されたデータから、PQP2 の各項目の欠損率、I-T 相関分析、探索的因子分析、クロンバック α 係数が算出され、構成概念の妥当性に関する仮説を検証した。結果、PQP2 の 2 項目が不適切と判断され削除された。さらに、PQP2 に 7 因子を特定し、クロンバック α 係数を算出したところ 1 つの因子で許容範囲を下回った。構成概念に関する仮説検証は概ね想定の範囲内であったが、ASD 重症度との相関が予想以上に高かった。これにより、PQP2 の開発と測定特性の初期的な検証が完了した。

研究 4 では、PQP2 のスコア分布の検証と ASD の診断を有さない障害児との比較を通して解釈可能性を検証した。研究 3 で収集された ASD 児のデータに加え、あらたに横断研究によって ASD の診断を有さない神経発達症児のデータが収集された。結果、

PQP2 のスコア分布は年齢と知能水準に有意差がないにもかかわらず、神経発達症児に比べ ASD 児でスコアが有意に低かった。また ASD 児は知能水準ごとに知的障害群、境界知能群、標準知能群に分類すると各群ごとにことなる参加のプロファイルが確認された。最終的に各知能水準の ASD 児の標準得点と、ASD 児全体の標準得点が示され、一部の因子に天井効果があることが判明した。

研究 5 では、PQP2 を用いて ASD 児の参加予測モデルの構築と検証が行われた。第 1 に、年齢、知的障害、ASD の中核症状、感覚処理障害、家族機能などからなる仮説モデルが構築され、第 2 に構造方程式モデリングによるモデルの検証が行われた。最終モデルは良好な適合度を示し、それぞれの変数が参加に与える経路とその強さが特定された。その結果、家族機能が参加に相対的に強い影響を与えること、感覚処理障害が家族機能を介して間接的に参加に影響する可能性が示唆された。

研究 1 から 5 を通して開発した PQP2 は、ASD 児の早期支援のためにデザインされた疾患特異的な参加測定ツールであり、信頼性・妥当性・解釈可能性が確認された。また、ASD 児の参加を支援する上で、家族機能を向上させ、中核症状や感覚処理障害に対処することの重要性が示唆された。今後は、縦断的デザインを用いてテスト再テスト信頼性やさらなる解釈可能性の検証が求められる。PQP2 は ASD 児の早期支援における参加のスクリーニング・モニタリングのために活用され、参加に焦点を当てた支援のためのエビデンス構築に活用できる。参加という当事者の視点に根ざし、多職種連携に貢献しうる概念を測定し、そのエビデンス構築の基盤を整備したという点が、本研究の保健福祉学への貢献である。

キーワード：自閉スペクトラム症, 参加, 尺度